



## 神戸角打ち学会忘年会風景



## 酒飲み、こだわり (中) 神の酒、民の酒

吉本 光一

正月に供えた鏡餅を11日に降ろして割り、汁粉などに入れて食べる。おなじみの鏡開きのセレモニーだ。大勢の人が集まる晴れの行事や町内の祭などで、酒樽のふたを木づちでたたいて割り、白木の杓（ひしゃく）で酌んで皆に振る舞う、これも鏡開きという。いまは樽詰めで出荷する蔵元はわずかで、たいていは酒問屋がレンタルの空き樽を借りて一升びんから詰めなおすところが多いという。大きな四斗樽はもとは72リットル入りだが、いまは上げ底で18～36リットルに改造されている。国内で開催される国際会議のレセプションでも、わが国伝統の鏡開きのセレモニーは遠来の客に受ける。酒が晴れの行事・祭事と一体だった長い歴史が、いまもそこに名残りをとどめている。

### ◇巫女の手元離れた濁り酒

万葉の歌人大伴旅人が大宰帥として赴任していたとき、梅の花香る大宰府の私邸で催した歌会が「梅花宴（ばいかのえん）」だ。ここに集まった歌人らは、後世、万葉筑紫歌壇の名で呼ばれ、万葉集全20巻4500余首のうち、この地で詠まれた歌は320首とも377首ともいわれる。そのなかに梅花宴で生まれた作品が32首ある。無類の酒好きの主が催すこの歌会で酒が重要なワキ役を果たしていたことは、宴の語が表している。

梅花宴のころには、こうじの製造、こうじを発酵させる醸造技術がすでに渡来していた、と歴史学者はいう。旅人や山上憶良らが酌み交わしたのは、いまの濁り酒のような、かなり進化したものだったらしい。醸造技術の伝来によって酒はある程度の量産化と高品質化が進んで、神・巫女の手元から離れて一人歩きしはじめる。また、律令制度が地方へと

普及してきたこのころは、神・巫女が中心に座を占める時代・社会から朝廷・官僚が中心に位置する時代・社会へと、政治・経済・社会の仕組みに大変革が起きる。そのなかで、朝廷の威光を背後に背負った官僚らの新興文化人が台頭し、酒はその創造力を高揚させる演出家へと変身していく。

神代の伝記である古事記によると、これ以前、すなわち神・巫女の手の中にあつた時代の酒は、宮中でも神からの賜り物として、特別の位置づけがされていた。こうじが渡来するまでは「口嚙（か）み酒」といって、人が集まって固く蒸した米をよく嚙んでつぼなどに吐き出し自然に発酵させた。醸（かも）すの語源は嚙むだったという。

米のでんぷんのままではアルコール発酵できないので、口に入れてかみ、唾液中のでんぷん分解酵素（アミラーゼ）を作用させて糖に変化させた後、自然界の酵母の力を借りてアルコール発酵させる。この方法では、アルコール濃度が国産ビール程度で糖分と酸味の強い酒しかできないが、神に供える酒は各集落ごとにつくられていた。卑弥呼（ひみこ）が登場する3世紀の中国の文献（三国志・魏志倭人伝）のなかで「人性嗜酒」と伝えられ、日本人の酒好きはそのころから海外でも知られていた。

#### ◇神の御酒と天皇

宮中内には造酒司が置かれ、また地方の村落では、首長か巫女が号令をかけると村人たちが指定された場所へ一斉に集まり、蒸し米をかんだ。

神功皇后が第4子、後の応神天皇に酒を賜ったときに詠んだ歌が古事記にある。

この御酒（みき）は 吾が御酒ならず 酒の神 常世にいます  
石立たす 少名御神の （中略） 献（まつ）り来し 御酒ぞ

少名御神とは、薬の神といわれた少名彦名命（すくなひこなのみこと）のこと。

「この御酒は吾が御酒ならず」のくだりは、古事記・日本書紀には何度も登場していて、神功皇后のオリジナルとは考えられない。このことから、酒を神と結び付けることへのこだわりが広く一般的であり、身分の上下の区別はなかったことがうかがえる。

「神から賜った酒」を若い皇子がどのように受けとめて味わったかについては、記述がない。このとき皇子に代わって建内宿禰が詠んだ返歌が皇后の歌に続けて記されているが、形式的な表現にとどまり、皇子の心情は表れていない。

皇子が口にした酒と村人のつくる口嚙み酒が同じものだったか、も定かでない。

スサノオノミコトの八岐大蛇（やまたのおろち）退治をはじめ、古事記や日本書紀には、悪者を酒に酔わせて退治する昔話がいくつも登場する。度数の弱い口嚙み酒で酔いつぶすことはとても無理であることから、何種類もの酒が相当以前から存在した、とみる説もある。

神功皇后が没して即位した応神天皇が酒に酔ったときに詠んだ歌が、これも古事記に収められている。その前文に「酒を醸（か）むことを知れる人、名は仁穂（にはほ）、またの名は須須許理（すすこり）ら参渡り来つ。かれ須須許理、大御酒を醸みて献りき。ここに天皇、この献れる大御酒にうらげて（浮き立って）、御歌よみしたまわく」とあり、中国から渡来した酒造り人須須許理が醸した特別の酒だとおわせている。歌は

須須許理が 醸みし御酒に われ酔ひにけり  
事と酒咲酒（ことなぐしゑぐし） われ酔ひにけり

と、須須許理のつくった酒は、憂いを退けて慰め微笑まずにきられない酒だと讃え、それに酔った楽しみを素直にうたっている。宴の席で「ああ、酔うた、酔うた」と素直に喜び、楽しむことができたのは、国の長、種族の長のほかになく、他の者はみな、神と上の恵みにただひたすら感謝し、その威光を讃えながら杯を押し頂いた。

#### ◇新しい国づくりの夢と行動

山上憶良は、神の威光を笠に着た首長・巫女が支配する閉塞社会と、万民に光を当てる法秩序を統治の柱とする新しい国の双方を身をもって体験した数少ない文化人の一人だった。だれもが幸せに暮らすことのできる法秩序を柱とする国づくりに希望を燃やし、自分の世代でそれを達成しえないと悟ると、次代、後継者に望みを託そうとしたのだろう。晩年の彼に子どもを詠んだ歌が多い。

その志は、梅歌宴・万葉筑紫歌壇の場で共有された。一人ひとりの創造力を育み、法秩序によって守られた新しい国づくりに投じよう、と彼は仲間呼びかけた。

憶良らは いまは罷らむ 子泣くらむ その彼の母も 吾を待つらむぞ

これは、新しい秩序ある社会・生活の構築に向かって、みんなが立ち上がり行動しよう、と、酒に託して仲間呼びかけた宣言文というほうがふさわしいのではないか。

## 天籟寺川橋物語その2

上田 喜久雄

### 猿渡橋・椎ノ木橋・竹ノ下橋

新年明けましておめでとうございます。  
本年もよろしくお祈りします。

昨年暮、戸畑区役所を訪ね、昭和36年4月当時（五市合併以前）の戸畑市全図をいただきました。

昭和36年は私が戸畑市役所に入職した年で大変懐かしく、また昨年10月に50周年を祝った若戸大橋が開通する一年前のことでした。

この地図を見ますと、戸畑の町の姿、変遷がよくわかります。天籟寺川の川下（洞海湾）に向かって山側（左側）の地名が、鞆ヶ谷、大谷、椎木谷、高峰、牧山と呼ばれるように、谷、峰、山の名前がついています。川の右側がひらけた平らな町となっています。

さて、今回の「猿渡橋」ですがその名前の由来は、橋の横の公園に建てられた看板に書かれていますのでそれを紹介します。

「この付近は昔、大字戸畑猿渡と言っていました。天籟寺川に橋が架けられていない時代、川の中の飛び石をぴょんぴょんと跳びはねて渡っていました。その渡る様子が猿に似ているところから『猿渡』と言うようになったそうです」

「竹ノ下橋」は昭和36年当時は町名としてありましたが、昭和41、43年頃の住居表示変更により無くなりました。私が覚えているのは、八幡製鉄の病院がこの竹下町にあり「竹下病院」と呼ばれていた頃のことです。現在はその地に大きなマンションが建って当時の面影はどこにもありません。次回は「新池橋」ほかを紹介します。

[お詫びと訂正]

前号で菅原道真公が「太宰権帥に左遷され…」と書きましたが、ソチの字が違っていました。正しくは「太宰権帥に左遷され…」です。お詫びして訂正します。

## 一夜だけの角打ち

蘇宅 韓五郎

丁度、1年前「はら閑その6」に“福德ゑびす”を掲載した。内容は1年後に、古酒？との呑み比べを行うということであった。

その、ゑびす酒造(株)の田中専務から11月2日にmailが入った、「一夜だけの角打ち」はいかがですかと。

以前から催すと連絡はあっていたが嬉しいmailで、また、「一夜だけの角打ち」の言葉に心が躍った。酒呑みにはたまらない響きである。いつものように、高速バスで杷木まで行くことにした。

18:30 開店ということであったが10分前に到着した。直売店には簡易カウンターとテーブルとイスで「一夜だけの角打ち」の準備はできていた。

私は、昨年の約束とおおり、20年前の“らんびきゴールド”と既に販売していない“らんびきゴールド”より数ランク上の“秘蔵の瓶(かめ)”を持参した。

田中専務と今売られている“らんびきゴールド”とを比べた。やはり、瓶の中でも熟成しまろやかになり香りも熟成していた。“秘蔵の瓶”も同様にアルコール分43%でも喉をスイスイとおるのである。

20数年でまろやかになっているのに、60数年たっても棘立っている小生は、いつ丸くなるのであろうか。

呑み比べの後、角打ちに来ていた地元の若者達と焼酎談義と世間話であつという間に時間が過ぎた。若者達は椅子であったが、当然、私は立ったまま。座ると何故か落ち着かないのである。いつの間にか身についた習性のようなものである。

“ゑびす”をキーワードに若松ゑびすに初めて行ったこの年は、結構いい年であった。「来年もお参りに行くとするか」「一夜だけの角打ち、響きがいいなあ」「来年も参加するぞ」と、ちょっと千鳥足で帰途についた。

- ・角打ちの連れに加へし木守柿
- ・蔵元で作るチュウハイ夜長かな



創業 127 年

# ゑびす蔵 感謝祭

-2012-

11/17 (土)・11/18 (日) 10:00~18:00

会場：ゑびす酒造(株) 小売部 ALEMbic

爽りの秋を迎え、自然の恵みと日頃からのご愛顧に感謝し、ゑびす蔵感謝祭を開催いたします。朝倉の深まる秋を楽しみながら、当蔵へのご理解を一層深めていただけたらと願っております。どうぞお気軽にご参加ください。

今年の9月6日におこなわれた平成24年福岡県酒類鑑評会本格的長期貯蔵(大廻)の部において「古酒ゑびす蔵」が福岡県知事賞を受賞いたしました。そこで...  
受賞記念と感謝の気持ちをこめて特別限定の「15年古酒ゑびす蔵」を販売いたします。

**35本限定**

43度・720ml ¥5,000 (税込)



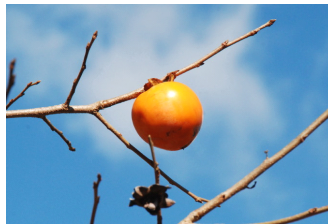
### イベント内容

- 特別限定「15年古酒ゑびす蔵」販売
- 角打ちNIGHT! (17日土曜の夜)
- 感謝祭プチブレ企画 わくわくミニボトル2本セット販売
- お楽しみ抽選会 お買上72000円ごとに1回抽選。ハズレ無し。
- 工房黨員会展示会 らんびきの貯蔵に使用した樽材の小物の販売

**★角打ち NIGHT!**

11/17 (土)  
18:30~22:00

本年1夜だけの角打ち  
別冊題え オールドボトルも登場!  
会費 ¥1,000 (おつまみ付)



木守柿



らんびきゴールドのチュウハイ

案内パンフ

## 謹賀新年

瓦口 龍

γ-GTP、血糖値等さらなる高みを目指してはらぐち会の正会員になれますように、努力精進いたします。よろしくお願ひ申し上げます。

夕刊をかぶり小走り初時雨  
竹とんぼ握りたるまま昼寝の子  
手の中の散歩の土産てんとう虫

小沢昭一師匠は変哲の俳写で句作を楽しんだ。たくまざるユーモアの中に小さきもの、弱きものへの優しさがにじんでいる。

12月11日、彼の訃報を新聞で知った。83歳、怪しげな役で光る名優として、民衆芸能の語り部として、まさに変哲だらけの代えの利かない才人だった。入院の報に接してより、経過がわからず心配していたが残念な結果となった。

フランキー堺主演の幕末太陽傳を元日にビデオでみた。時は幕末の品川宿、遊郭の一軒相模屋のおそめは、毎晩つぎつぎにおよびのかかるこはるを恨めしく思っていた。誰かと心中して浮名を流そうと出入りの貸本屋金造をそそのかし、棧橋から身を投げるも行ったのは金造だけ。女郎の苦悩を表現する屈折の名演技でした。日活 1957年作品、若き小沢

昭一のチョイ役の一コマでした。清潔感のある助平衛爺でした…とある女優。矛盾の極み、真似のできないことだ。

TBS ラジオ“小沢昭一の小沢昭一的ころ”はオープニングの音楽と共に多くのファンの心をつかんで離さない。40年1万回を越す長寿番組である。3年前の番組は“ぼちぼち”のシャレで墓をとりあげていた。千の風になるのは嫌だと語っている。

「ちっちゃい石ころ一つでもいいから、私の骨のある場所の目印があって欲しいなあ、そこから私ね、この世の行く末をじっと見てるんだ」。まさに小沢昭一的ころなのだ。師匠の目を常に感じ、舌禍の完治を、とも思う。

周防猿回しの会の結成にも小沢さんの協力が大きかった。

迎合しない個人の生き方を固めていったという演劇評論家もいる。迎合大歓迎の小生、岩手の小沢某とも混同し始めた年末よりのコップ酒をひとまず置こう。

石清水にみたてて蛇口の水で顔を洗うのだからこのころである。朝日新聞「天声人語」を参考にした～～のころなのだ。

## 寒くなりましたね～

博多海鮮居酒屋はじめの一步：女将

こんにちは～！！

寒くなりましたね～。

今年ももうあと少しになりましたね～～。

そして「ごまさば」がおいしい季節になりましたね。

一年中鯖は海で泳いでいますから、いつでも売られています  
やはりこの時期の鯖はピカイチです。

最近は濟州島あたりの鯖がよく入ってきますが

脂がのってうまいですよ～～！！

食べたくなってきたでしょ～～～（^◇^）

ところで「ごまさば」は鯖の名前なのか？ということをよく聞かれますが

「ごまさば」という鯖はいます。

でも博多では「ごまさば」といえば料理の名前で

当店ではごま鯖は使わず「真さば」を使います。

ちなみに私の車のナンバーは「5038」（ごまさば）です。ははは、（´ー`）ノ

とにかく今は鯖が一番おいしい季節！！

ぜひ皆様お越しくださいませ！！

## 虚実皮膜論

櫻木 大祐

美しい花が好きだ。美しい器が好きだ。美しい絵が好きだ。美しい色が好きだ。美しい言葉が好きだ。美しい数式が好きだ。美しい脚が好きだ。美しい髪が好きだ。美しい音楽が好きだ。美しい光が好きだ。美しい嘘が好きだ。美しい涙が好きだ。美しい…美しい…美しい…美しい…

近松門左衛門のいう「虚実皮膜論」というのがあって、それをうわべだけ要約すると「真実は美しいとは限らないけど、美しいモノは真実だ」と、いうことらしい。

でもさあ、「美しい」とか「真実」って、いったい何なんだろう？  
美しさや真実や好きや嫌いや本当や嘘って、結局は人それぞれじゃね？

そして酔っぱらいの僕は、隣のおばちゃんが美しく見えてきました…  
それだけが今の僕のリアル……。

ヤバっっ!!飲み過ぎ飲み過ぎ!!

## 「北九州に馴染むわけ」

徳永 雅樹

五年前、一人で訪ねた折尾の某酒店が北九州角打ちのデビューでした。これまで多くの角打ちを経験してきたが今でも初めての店は度胸がいります。それが角打ちが持つ独特の空気なのかもしれない。

そこでは常連さんたちが美味しそうに楽しく飲んでいる姿を目にする。時にはその会話をアテに、時には会話に入れてもらったり。

最近、北九州のタウン誌「雲のうえ」を頂いた。「言葉」をテーマに面白おかしくまとめられている。同じ福岡でも博多と北九州は言葉が違う。それは大分に住む私にもわかる。でも北九州と大分は似ている。おそらく意味も発音も同じと思う。それだ！北九州のどこの角打ちに行っても違和感がないのは。酒店の中は大分も北九州も同じだった。

私にとって特急電車で1時間半の北九州は大分なのだ。



そういえば直方出身の妻との会話も言葉に違和感がない。なんかなし意味わかるし大分弁くらいなんちゃねえらしい。

## ネジ巻き時計

福田 紀六

5, 6年使ったデジタル時計の文字盤が化けてしまった。お気に入り（県庁行き用？）以外の腕時計を取り出してみると全部電池が切れていた。その中に一つだけ、30年ほど前に、職場の後輩に貰った1947年のディズニー映画「こぐま物語」の「ボンゴとルルベル」の睦ましい絵入りの時計があった。振ってみると秒針が動く。螺子を巻いてみるとなんと確実に動き出した。

翌日からほかの時計はそっちのけで腕に付けた。が、迂闊だったのは時間を見るたびに止まっている。なんでもデジタル化に慣れてしまった無精者にとっては、不便なものである。

しかし、螺子を巻くと動くという時計に愛着が出てきた。ちなみに、一度30回巻くと12時間は動く、一日に決めて3回巻けば、ハートを射抜いた秒針の矢が刻々と動くのである。

今では、自分の手が物を動かす事の出来ることにある感動を覚えている。

昨年は、また手足が動かなくなり2回目の頚椎の手術をした。国の難病に指定されている広範囲脊椎管狭窄症とのことである。今年も早い時期に腰椎の手術を予定しており、次々に人工骨に換えていかねばならないらしい。手術をすれば動きだす手足、「ボンゴとルルベル」の腕時計のように人生もまた時々螺子を巻かねばならないことに気づかされた昨年であった。

ご無沙汰しています。響金太郎です。

響 金太郎

遅ればせながら、はらぐち閑話10号達成おめでとうございます。ニフティーのブログを見つけてネットで拝見しています。最近では櫻木さんの「言い訳」の記事がおもしろかったです。はらぐちさんにもまた行きたいです。

さて、先日オーディションにとおり、2月に久しぶりにまた北九州芸術劇場に出演できることになりました。

お時間ありましたら、ぜひ見に来てください！

リーディングセッション vol. 21

「不思議の国のアリス」の帽子屋さんのお茶の会 作：別役実 演出：近藤良平

日時：2/2（土）18時、2/3（日）14時、2/4（月）14時

会場：北九州芸術劇場小劇場（リバーウォーク6階）

料金：1500円

※日時指定・全席自由

役者の稽古から本番までを約1週間に凝縮して演劇のエッセンスを味わっていただく人気企画、第21弾は、学ラン姿でダンス、映像、コントなどを展開する人気のダンス・カンパニー「コンドルズ」の主宰であり、野田秀樹演出『THE BEE』では役者として新境地を開いた振付家・ダンサーの近藤良平を迎え、別役実のちょっと不思議でおかしくて子どもから大人まで楽しめる戯曲を上演します。

戯曲×音楽×ダンスの融合に、ぜひご期待ください。

詳しくはこちら→

<http://www.kitakyushu-performingartscenter.or.jp/event/2012/0202read.html>

会場でお会いできるのを楽しみにしています。どうぞよろしくお祈りします。

## 目玉ナビ vol.4

### 一粒で二度美味しいが持ち味の‘サッカー観戦な旅’

旅人‘ぶら目玉’こと 松住 隆夫

はら閑読者の皆様、あけましておめでとうございます。今年もよろしくお祈りします。

#### ■サッカー観戦は旅とセットで楽しむのが目玉流（^-^）/

関東の北部にある小さな街・栃木市に2週続けて出かけてみた。

サッカーJリーグの下に位置するJFL（日本フットボールリーグ）の入れ替え戦を観るためだ。埼玉の自宅から、JRと東武鉄道を乗り継ぎ2時間余りかけてやってきた。

駅から会場の栃木市総合運動公園陸上競技場までは2キロメートルほどの距離がある。

普通なら、バスやタクシーで移動するところだが、このくらいの距離なら歩くのが良い。

軽い運動になるし、街の観察もできる。そもそも歩きは観察に適している。車に乗っていたら見落とししかねないものでも、歩きのスピードなら発見のチャンスが増える。

たとえば、駅から5分ほどのところで『本日、修行の旅に出ています。』と書かれた小さな看板を掛けた食堂を見つけた。‘本日休業’の意味で使っているのだが、なかなか遊び心がある言い回しだと思ったので、携帯で写真を撮り、すぐさまツイッターで「ぶら目玉…本日のお題（^-^）v」とつぶやいた（写真1）。

先へ進むと、今度は、味噌屋さんに出会った。‘油屋傳兵衛’と書かれた白くて大きなのれんは和風の香りがした（写真2）。田楽を食べさせてくれることも分かった（写真3）。

それなら、試合が終わったあとに立ち寄ろうじゃないかと、観戦後のスケジュールも具体化した。こんな風に、サッカーを楽しむ時には、観戦の前後に街を観察して発見を繰り返す。

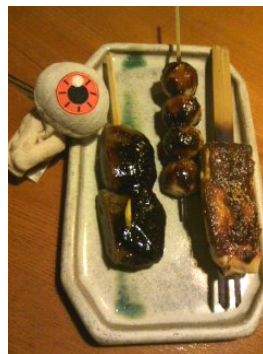
返しながら楽しい気持ちで歩いて行く。一つの旅で二つの楽しみ。歩くからこそできる旅。これこそ「一粒で二度美味しい目玉流『サッカー観戦な旅』」の極意なのだ。



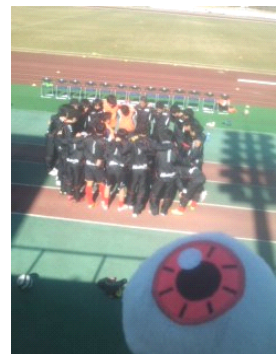
(写真1) 本日のお題



(写真2) 味噌屋さん



(写真3) 味噌田楽



(写真4) 北海道『円陣』

## ■ 日本一過酷と言える入れ替え戦に最後に力尽きたノルブリッツ北海道 w(>\_<)w

さて、今回の入れ替え戦は、今年の成績がJFL最下位に終わった栃木ウーヴァFCとJFLへの昇格を目指して全国地域サッカーリーグ決勝大会で3位になったノルブリッツ北海道の対戦で、アマチュアクラブ同士の試合である。ホーム&アウェイ方式による2試合の成績で昇格・残留の是非を決める。本来ならそれぞれの本拠地で1試合ずつ行われるところだが、この時期の北海道は積雪があるため、2試合とも栃木市での開催になった。

その1試合目は12月9日(日)14時にキックオフした。当初は13時の予定だったが、前日、大雪で飛行機が欠航し、北海道は試合当日に飛行機とバスを東京経由で乗り継いで栃木入りすることを余儀なくされた。そのためキックオフが一時間繰り下がったのだ。

試合前に円陣を組み気合を入れた北海道(写真4)は、開始早々いきなり栃木に先制を許したが、前半のうちに同点とし後半13分には逆転に成功。そのまま北海道が2-1で逃げ切った。しっかり守って奪ったボールを栃木のDFの裏に出してFWの決定力に賭けるといふ速攻に徹する粘り強い戦い方を貫き、それが効を奏した試合だった。実質2試合ともアウェイの状況で、飛行機欠航のアクシデントにも見舞われながら迎えた初戦を、先制されながら逆転勝利したのだから、試合後の北海道はとても良い気分だったに違いない。

ところが1週間後の16日(日)、2試合目の北海道の動きは鈍かった。戦い方は1試合目と同じだったが、DF裏へのパスがFWと噛み合わずシュートまで至らないのだ。一方栃木は、北海道とは逆に何度もチャンスを作ったが詰めの精度が欠けて決め切れずにいた。

だが、思いがけないことがサッカーではよく起こる。後半17分、北海道は自陣ペナルティエリア内でハンドの反則を取られ、栃木にペナルティキックを与えて決められてしまったのだ。試合はこのまま1-0で90分を終えて、2試合戦った時点で総得点が2-2のイーブンとなったため、30分間の延長戦で決着をつけることになった。

北海道は、足が止まりもう防戦一方だった。栃木のコーナーキックの際には、ショートコーナー狙いの動きに誰も反応が出来ず、ベンチから怒鳴られるシーンがあった。北海道は極度の疲労で身体が動かないだけでなく明らかに集中力も失っている状況に見えた。

しかし、栃木も決まらないシュートを連発し、栃木を応援している観客席からは「決めろよ!」と野次が飛び、外すたびに大きな溜め息があちこちから聞こえてくる始末だった。

結局、勝負はPK戦に纏れ込んだ。だが結果はあつげなかつた。先蹴りの栃木は、3人目まで連続で決めたのに対し、後蹴りの北海道は1人目がクロスバーにボールを当てて失敗し、2人目は決めたものの3人目がGKに止められ、栃木の4人目が成功した時点で栃木の4-1で勝利が決定。最後は北海道が自滅する形で、辛くも栃木がJFLに残留した。

観戦を終えて、北海道が勝てず、栃木も全体にパツとしなかつた事情を考えてみた。

それは身体面における問題で、北海道は疲労であり栃木は実戦感覚の不足だろう。

直前一ヶ月の両チームのスケジュールを比較してみると、ともにアマチュアクラブであるために、選手たちは平日に仕事をこなしながら、北海道は11月16~18日に高知に遠征して三日連続で90分戦い、11月30日~12月2日には長崎に遠征して再び三日連続で90分と2週間で6試合を戦い抜いて、今回の二度の栃木遠征に臨んでいた。一方、栃木の11月は18日までにJFL公式戦3試合を戦ったのみで、この入れ替え戦に出場した。

こうした状況では、北海道は疲労を十分に回復することが出来ないはずだ。その影響で足が止まるという形が2試合目に出てしまったとしてもおかしい話ではないだろう。逆に栃木は、試合のない期間が3週間もあったため試合勘が鈍っていたと考えられる。

また、北海道の敗因については心理面からも考えるべき問題がある。‘幸先よく初戦を勝利し2試合目は引き分けでもJFL昇格’というアドバンテージが悪い方向に影を落としたことは否めない。なぜなら引き分けOKという状況では迷いを生みやすいからだ。守備陣が‘守っていればよい’と思う一方で、攻撃陣は‘先に点を取りたい’と思いがちになりいつもと違う心理状態に陥る。そのことでチームのバランスが崩れ、そこに疲労によって足が止まるのが重なれば、試合中の修正はとても難しいものになったはずだ。

さらに勝負がPK戦に纏れ込んだことも見逃せない。実は、北海道は長崎で三連敗してしまい、そのうち二つはPK戦で負けているのだ。悪い印象が北海道の選手の頭の片隅に残り、それが‘また負けるのか’と不安を呼び、PK戦に影響したとしても不思議はない。

こうして一ヶ月間、平日に仕事をしながら4度の遠征をこなす中、疲労が身体に蓄積し、戦いの辛さに心を揺さぶられた北海道は、あと一步のところまで力が尽きたのではないかな。

この北海道の戦いぶりが‘日本一過酷な入れ替え戦’と言える所以だと思うのだが…。

## ■ ひよんなことから露呈した栃木ウーヴァFCの裏事情\(^-^)/

試合後、勝利した栃木の選手やクラブ役員が観客席に向かって挨拶したのだが、その中の一つに「最後の最後でチームが一つになれた」という話があった時は思わず笑ってしまった。「やれやれ、こんなクラブなら北海道に勝たせたかった」と思いつつ競技場を出た。

このあと向かったのは、競技場に来る途中で出会った、あの味噌屋の‘油屋傳兵衛’だ。

実は1試合目の時はキックオフが1時間遅れたおかげで、店が開いている時間に間に合わなかつたのだ。そのため、この2試合目の帰り道での立ち寄りとなった。楽しみにしていた味噌田楽を注文し、盛り合わせで芋と豆腐と蒟蒻の3本を食べた(写真3)。

しばらくすると、おじさんが1人「寒いなあ」と言いながら店に入ってきた。常連客らしく、「いやあサッカー、やっと勝ったよ」と店の人と話を始めた。それを耳にして、ついこちらから「でも、試合後の挨拶は笑っちゃいましたよね」と話しかけたら、「そおなんだよ、チームがバラバラで、シーズン中にスポンサーがいくつ逃げて出たくらいなん

だ」と返ってきた。「地元ならではの裏事情だなあ」と思いながら、また笑ってしまった。

味噌田楽のあとは、1試合目の帰り道で見つけたレトロな建物の、通称‘金魚の湯’と呼ばれる銭湯を目指した(写真5)。その途中、開運橋という橋に出会い、ここでもツイッターで「ぶら目玉…渡ると開けるのか?(´~´)/」とつぶやいて遊んだ(写真6)。

栃木市は、昔懐かしい昭和の趣きを感じられる建物が多く残る街で、この食堂には見ただけで入って食べたくなった(写真7)。こうした発見が、旅人‘ぶら目玉’の醍醐味だ。

到着した銭湯の前にはこんな看板があった(写真8)。このあと酒を身体で浴びた(^\_^;



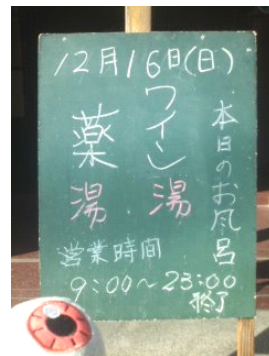
(写真5) 出会った銭湯



(写真6) 開きたい



(写真7) 昭和の趣き



(写真8) 本日のお酒

\*ぶら目玉はツイッターでつぶやき中…ユーザー名は syabekuru(紗辺久流)です(^\_^)

[サッカー観戦な旅 実施日：2012年(平成24年)12月9日(日)・16日(日)]

## 編集後記

☆太宰府の梅とは菅原道真の飛び梅とばかり思い込んでいました。それより 170 年も前の大伴旅人にルーツがあったとは、「酒呑み、こだわり」を書いて初めて知りました。物を書くとは教わること。物書き、汗かき、恥じかき、べそかき、ペースの衰えた成長を少しでも取り戻そうと、励む（酒の合間に？）日々。皆様の今年のご健筆を祈ります。

☆正月明け、体重計・血圧計が気になります。デジタル型だとなぜか低めに出ます。その逆は郵便局の郵送料表示のはかり。書類を詰めた定型外の封筒をキチンのはかりに乗せたら、針と 100g の目盛りが重なりました。念のため、分銅の付いた天秤（てんびん）を引き出しから取り出して計るとこれもジャスト 100g。料金表は 100g まで 140 円。切手をはって郵便局のはかりに乗せたら、何と「200 円」なのです。針と目盛りを目視するはかりなら 100g までだから 140 円と判断しますが、デジタル型にはそんな機微はない。10 分の 1g でも超過すると遠慮会釈なしに 1 ランク上の料金が表示されます。切手の重さだけの超過を感知したのかもしれませんが。（ぼんぼん仙）

☆神戸角打ち学会の行動力はもの凄いものがあり羨ましい。これは、渡邊会長と HAKUDOU 事務局長とのバランスが素晴らしいからである。また、本当に酒を飲み、愛するからできることであり、これからの発展が楽しみである。

☆元日の朝は真っ白であった。迷走には飽きた、この白が年末には何色になっているか？

「まあ、ゆっくり世間話をしていきませんか。お茶でなくお酒を呑みながら」。

投稿をお待ちします。題材、文の長短を問いません。「酒」に縁のある内容であればいいことなしです。

投稿は、はらぐち酒店に預けていただくか、[kei2@bronze.ocn.ne.jp](mailto:kei2@bronze.ocn.ne.jp) へ宜しく願います。

「はらぐち閑話」は、はらぐち酒店HP (<http://homepage1.nifty.com/haraguchi/sake/>) もしくは、戸畑はらぐち酒店で検索してくださいの「かくうちの部屋」でご覧いただけます。

次回発行は 3 月 11 日 (2 月 28 日締切り) とします。(今朝の鮭)

はらぐち酒店：北九州市戸畑区中本町 4 番 1 9 号

電話 0 9 3 - 8 7 1 - 2 1 5 0

[sake-tobata@nifty.com](mailto:sake-tobata@nifty.com)